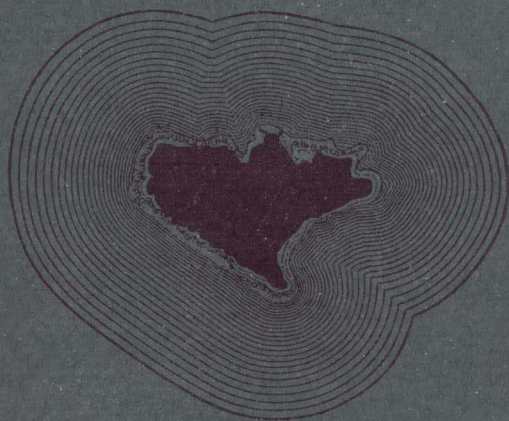
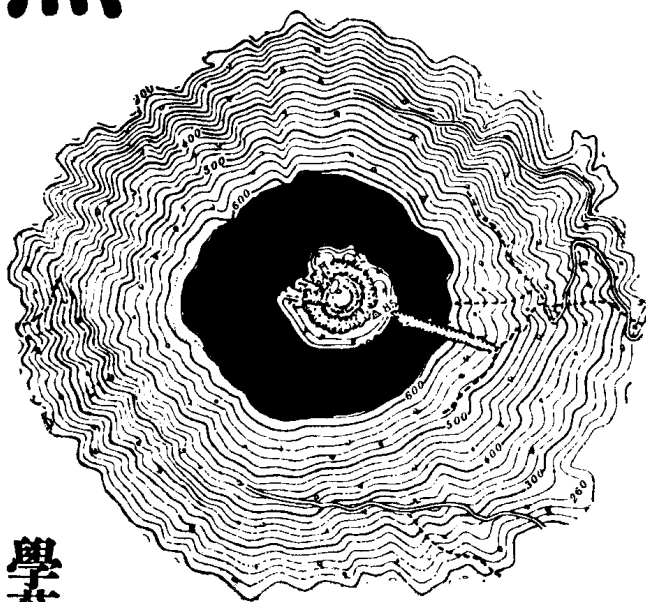


歴史への視点



・現代文学の発見・第十二卷

史への視点



學藝書林

全集・現代文学の発見 第十二卷
歴史への視点

著者代表Ⅱ井伏鱒二 ©

編集者Ⅱ八木岡英治

発行者Ⅱ岡田廣

印刷者Ⅱ和田彰三

発行所Ⅱ株式会社 學藝書林

東京都中央区西八丁堀二の十 振替東京一〇八二一

印刷・製本Ⅱ東洋印刷

昭和四十三年八月十日第一刷発行 七五〇円

送料九〇円

目次

江馬 修

山の民 Ⅱ 蜂起 Ⅱ 7

井伏鱒二

さざなみ軍記 Ⅱ 169

中山義秀

土佐兵の勇敢な話 Ⅱ 241

中島 敦

李陵 Ⅱ 253

坂口安吾

二流の人 Ⅱ 285

田宮虎彦

落城 〓
343

井上 靖

樓蘭 〓
371

杉浦明平

秘事法門 〓
401

大原富枝

婉という女 〓
421

大岡昇平

解説 〓
505

裝
本

栗
津

潔

歴史への視点

江馬 修 「山の民」―蜂起―

えま・しゅう 一八八九。岐阜県に生る。斐太中学中退、明治四一年上京し神田区役所に勤めるかたわら自然主義的な小説を書く。四四年「早稲田文学」に短篇「酒」を発表し好評をえたのが機縁となり、短篇集「誘惑」を上梓。ついでヒューマニズムを基調とする「受難者」「暗礁」などの長篇をつぎつぎと刊行して喝采で迎えられたが、関東大震災にあい、その体験が思想的開眼の機となった。第五の長篇「追放」がその記念碑である。大正一五年欧州旅行、帰国後「プロレタリア作家同盟」の中央委員、「戦旗」の編集委員となり、同誌に小説・戯曲を発表。弾圧の強化とともに帰郷。郷里飛騨の調査研究に没頭し、ライフワークともいふべき大長篇「山の民」の完成を見た。（昭和一五年自費出版、二三年改作、理論社より出版）つづく「本郷善九郎」「流人」などともに日本の黎明期を描いた異彩の歴史小説で、今後の評価を待つものといえよう。

山の民

一

川原町組頭・川上屋善右衛門は、正月早々から上洛の折をねらっていたが、もはや一日も猶予がならぬと感じ始めた。というのは、町々村々の情勢が不穏をきわめ、いっどんな事件が突発しないともいえない状態になってきたからで。それに、もう一つには、役所への密告がさかに行われたので、自分の秘密な計画が役所にもれて、何時どんな危難が身にふりかからぬとも言えなかった。彼は一刻も早く、梅村の権力のおよばぬ国外へ出る必要があると思つた。ただ、唯一のたのみである脇田頼三が、はたして京都にとどまっているかどうかはつきりしなかったもので、つい出立を一日のばしに遅らせていたのだった。

五日の御用始めに、善右衛門は町会所へ出勤した。その時彼は数名の組頭と共に、高山の蓄穀倉、すなわちかつての郷倉の、建立掛りを任命された。第二部で既に語つたよ

うに、梅村知事は太政官から村々御救いとして下附された六千両を基金として、飢饉の備えのために、三郡村々にならず一個の郷倉（蓄穀倉）を設けさせることにしていた。もちろん高山県の命令であり、強制であつた。一般の村々では五間に八間の倉を、大村では八間に十間の倉が指定され、かならず当年中に完成して蓄穀することを命ぜられた。高山では六間に十間の倉を八カ所に建立して、廻廻九万九千九百七十五俵（この米五万九千九百八十五俵六合）を蓄穀せよと命ぜられていた。

たださえ郷倉は民衆に迷惑がられているのに、新たにこのような大規模な蓄穀を強制されて、人々は言い難い恐慌を感じた。その建立掛りを命ぜられ、郷倉建立の図面を渡されて、やむなく一同は受けたものの、みんな暗澹とした気分だつた。善右衛門は町会所から家にもどると、すぐせがれ善六を奥の間に呼びこんで、こう言つた。

「じつはきょう、おれに郷倉作りをやれと言いつかつたが、おれはもう、これ以上梅村政治の手助けはしとうない。それで、よっぽど断わろうかと思つてみた。じゃが、こいつを辞退した日にゃきつと疑がいをうけて、咎めをうけると思つて、黙つて引きさがつてきたがのう。とにかくおらア何とか商用にかこつけて、一日も早う国を出ようかと思ふ」

「ああ、それが良かる」と善六はすぐに同意した。

「でも、そんな掛りを言いつかるところをみると、まだ疑がわれてはおらぬと見えるのう。良えあんばいじゃ。これならお役所から旅手形もすぐにもらえるじゃろ」

「ただ脇田さまの居所の分らぬのが心もとないが、まア、運を天にまかせて、思いきって出かけるわい」

その晩呉服商の光賀屋吉右衛門がたずねてきた。彼は同じ町組頭の中でも川善とはいちばん親しい間柄で、梅村を憎むことでは、いわば同志であった。彼は奥の間のこたつで声をひそめながら、こう話した。高山の医師滝原礼造、町人清水屋長左衛門、谷屋甚兵衛、米屋庄兵衛の四人が、それぞれ商用のためと称して、この三日京都へむけて出発した。商用とはもとより表面の口実で、実際にはいずれも梅村の暴政をみるに堪えかねて、太政官に訴願し、知事の交替を内願するのが目的であるらしい。この上は、善右衛門も一日も早く上洛して、滝原たちといっしょになって、奔走してくれたらどうか、というのであった。

これをきいて善右衛門はにがりきった顔をした。そしていかにも迷惑そうに、

「なら、おれに滝原たちと徒党して訴訟せよと言わっしゃるのか。徒党なんておれは御免じゃ。お前も知つとるとおり、おらア初めから、こんどの内願はあくまでおれひとりやる覚悟なんじゃでのう」

「そりや分つとる。でも、こういう内願も、一人でやるよ

りや、多勢かたまつてやる方がききめがあると思わぬかえ？ 人数が多いほど村々の願いじゃということになるで……」

「とにかくおれは、滝原や、清水屋といっしょにやるくらいなら、上洛もやめようと思う。それに、外に上洛して骨折ってくれる人がそんなに四人も揃っておるのなら、おれまでわざわざ余分な銭を使つて、京都まで行かにならぬという訳もないで」

光賀屋がかえつた後も、善右衛門はひどくきげんが悪かつた。そして善六にむかつて、当分京都ゆきは止めだと言いつ出した。ところが、次の朝、代官橋づめの制札場の前で、山方百姓二十九人がタタキばらいにされ、そのひとりが叩き殺された。この事件を知つて、川善はまたそのひどいあばた面を曇らせて考えこんだ。そして晩になると、善六にこう言つた。

「やつぱり、どうも梅村のやり方を見ておれぬわい。こりや、どうしても上洛して、ひと骨折らぬ訳に行くまい。

まア、滝原やなんかは別々の手づるもあつて、いろいろ考えもあるんじやろ。じゃが、おれはまたおれじや。それに、脇田様のようなりっぱな手蔓のあるものは、おれの外にやありそうも無い。やつぱりおら京都へ出かけて、みんなのためにひと働きやつてみるつもりじゃ。おれじやつて、もう六十年も娑婆で生きてきたんじや。万一このため

に命をすてたところで、別に後悔することも無いわ」

そして八日の朝、彼は商用のために美濃関町まで出かけたといふ願ひ出た。役所ではただちに道中手形を下附した。彼はその日のうちに高山を立った。そして関町には一泊しただけで、一路京都にむかつて急いだ。

川善は十六日に京都へついて、かねてなじみのあつた三条の千切屋に宿をとつた。さっそく手紙で問合せてみると、脇田頼三はやはり岩倉家の執事として京都にとどまつていた。しかし、留学のためとあつて、数日後に長崎にむけて立去るところであつた。善右衛門は全く良い所へやつてきたのだ。つぎの朝早く、彼は国元からたずさえてきた春慶塗の盆や、みごとに百合の球根など、土産品をしこたまもつて、脇田を訪ねて行つた。脇田はすでに彼の到来を知つて、心まちにしていた。そしてねんごろに彼の内願の件をききとつた。脇田は明らかに深い関心を示して、梅村の政治のやり方をなおこまごまと質問した。そしてできるだけ彼の内願のために力ぞえすることを約束した。同時に、改めて願書を差出すように促がし、二三の有力者への紹介状をも書いてわたした。

この脇田は一年前高山にいて、竹沢寛三郎を失脚させ、逮捕するために蔭にあつていろいろ画策をやつたことがある。その竹沢は加納藩の手で捕えられてから、転々して、

最後に板橋の総督府本営におくられた。そこで検べをうけたが、嫌疑が晴れぬままに、四月十日には忍藩に御預けとなつた。そこで六カ月間城内に幽閉されていたが、十月十日になつて、ようやく無罪ときまつて釈放された。今では郷里の徳島にかえり、一切の公務から離れて、自宅に謹慎しているという事であつた。いわば、脇田は郡上青山藩と共謀して、竹沢をおとし入れたものと言える。後になつて、脇田頼三は刑部省に捕われて、死刑にされている。それがどんな罪状によつたものか、今のところ明らかでない。しかし人材欠乏の叫ばれた維新の際にも彼は拔擢の榮をうけていないし、いつも岩倉の勢力を背景にしてある程度幅をきかせてはいても、日常かなりな不平等であつたようだ。そしてつぎつぎ陰險な策謀をやり、賄賂をよろこんだ人間であつたことはほぼ推察される。こんども彼は川善の訴えをきくと、個人的な情実によつて初めから彼に加担する立場をとり、かつて竹沢をかたむけたように、こんどは梅村をかたむける策謀に一役を買つたのだ。

そういう脇田を、川善は朝廷と新政府にかなりな勢力のあるえらい人と思ひこんだ。この人を味方にもつて、彼はすでに梅村知事をうち負かしたも同然だと思つた。何とさき先の良いことか！ 彼は千切屋へもどると、さっそく小机にしがみついて、願書をしたためにかかつた。彼は古風なみやびた文章で随筆めいたものを書くことは好きだつた

が、暴政をばくろし、弾劾するような激烈な願書など書いたことがなかった。気持は内にあふれていても、適切な言葉が思い出されず、文章は体をなさなかった。彼は漢学者赤田屋瑛次郎がいっしょでないことを悔んだ。しかし今はそんなことを言っていられなかった。すでに、国元であらまし書きつけてきた内願の条々を、文章の巧拙にかかわらず、いちおう書きまとめねばならなかった。

恐れ乍ら口上書を以て願上奉り候。

飛驒国大野郡高山町二ノ町村の内、川原町川上屋善右衛門儀、恐れながら申上奉り候は、高山町または在々、難渋いたしおり候を見るに忍びず、当正月九日出立仕りたき段御手形願上候て、ようやく十六日到着仕り候次第は、さる梅村様御入陣後、難渋のかどこれ有り候えども、この度上京仕り候は、去月二十四日、山方組小坂郷阿多野郷より願出で候趣意は知らず候えども……

恐ろしくごたごたした・拙劣な文章ではあったが、彼はまずこんな風に、山方米の廃止をめぐる村々の難渋と歎願から筆を起し、それに対する梅村の乱暴で無慈悲な弾圧ぶりをこまごまと書いた。それから商法局の設置に伴なつて、人民の商法が成立たず、町人はもとより村々まで非常に困っていることに説き及んだ。その外、堤防築造、新田

開発、増税と賄賂の横行、買受米の廃止と増税、密通取締りとおろくの件、愛妾おつること、郷兵取立て、御貸付金の強制回収、郷倉と学校の建立、人材拔擢と称して正直な人々をしりぞけ粗暴なやからを重用することなど、すなわち梅村の着陣以来行なったことで何ひとつ善い事はなく、すべては人民の迷惑となり、そのために三郡村々は極度な難渋と悲歎の中に沈んでいるのを、口を極めて告発した。もとより事実の曲解と誇張が多く、みえすいた捏造と中傷もまじっていた。しかし彼は仇敵に対する怨恨と憎悪にかられて、ざん訴にあたることも躊躇しなかった。要は梅村を傷つけ、おとしいれるにあった。そのためには手段もえらばぬであろう。烈しい毒意にもえつつ、彼は夜を徹して一心不乱に願書を書きあげた。

つぎの朝、彼は早々岩倉御殿に出かけ、脇田に会つて、願書を提出した。宛名も脇田頼三になっていたのだ。すると、その日のうちに、脇田から使者がきて、つぎのような伝言があった。

「願書をただちに御殿へさし上げたところ、まことにふびんな次第である、これほどの暴政を打ちすておく訳にはまいらぬ。改めて刑法官にあてて願書を差出すように」

善右衛門は喜びのあまり、この事を高山の光賀屋へあてて書状にしたため、飛脚に托した。同時に、一心こめてふたたび願書をまとめ、脇田の添え状をもらって、それを刑

法官まで持参した。刑法官知事土肥謙造が、評定所で善右衛門の口上をききとり、願書をいちおう目をとおした上で、受理した。善右衛門はさらに脇田の添え状をもらって、その晩土肥を私宅におとずれた上、願書の内容をもっと立入って詳細に説明した。

ところで、脇田の長崎にむけて立つ日が近づいてきた。善右衛門は千切屋の別座敷をかりて、送別の宴をはるために彼を招待した。脇田は中年の知人を二人伴なってやってきた。この二人は今後も善右衛門のために協力してくれる約束だと言って、紹介された。酒をくみかわしながら、話はおのずと高山のこと、梅村のことが中心になった。竹沢を逮捕したころ、脇田は梅村を信頼していたらしく見えたが、実際には内心非常に危ぶんでいたのだと語った。だから、今日梅村の暴政をきいても、別におどろかないとも言った。彼が高山でわりあい親密にしていたものに、地役人頭取吉住礼助があった。そしていま、吉住親子が合羽屋おらくの件で、梅村の嫉妬と憎みを買って、不幸な境遇におかれていることが分った。脇田はそれをきいて梅村に対していよいよ腹を立て、よしや自分が不在になっても、刑法官には親しい知人も多いので、遠方からあくまで善右衛門の訴願を応援しようと約束した。

つぎの朝脇田は出立した。殆んど見送りのない寂しいかどでだった。ゆうべも酒の席で、色々な話の中で、若い同

僚たちがそれぞれ拔擢され、立派な地位を与えられて東京へ発向するのに、初老にもなって勉学のためにはるばる長崎へ送られる自分の身の上をあまり幸運と考えていないことを、脇田はふっとわびしげに漏らしていた。善右衛門は同情して、彼と伏見までいっしょに行った。そこで、また二人だけで、別宴をはった。じつは善右衛門の腹中では梅村が罷免された後で、その後釜に脇田をもつてくることを考えていた。いま、別れに臨んで、彼はそのことを口に出した。脇田はちょっと意味ありげに笑って、「むろん拙者も、長崎なんかより高山の方が好ましいさ」と言った。そこで、善右衛門は膝をすすめて、自分はあくまであなたを高山県の知事にお迎えするつもりで、内願をつづけるかくごだから、今後とも御支援をねがいたいとあらためて頼みこんだ。

脇田に別れて京都の宿にもどると、刑法官から善右衛門に出頭を求めてきていた。彼は太急ぎで役所へ出かけた。大谷源兵衛が評定所で彼を取調べた。それについて、彼は高山の伴善六にあてて次のように書いた。

「……刑法官より御用これあるおもむきにつき、さっそく罷りいで候ところ、色々と御調べこれあり候。安石代買受米のこと、だんだんお願い申上候ところ、これまで徳川家の間はそれにてよろしかりしも、今より後は、米

値段は世間一統のことと相成るべしとして、おん聞き入れこれなく候。徳川家の政治悪しき故に国民一同難渋におちいり、今日御一新と相成り候と承わり申候。しかるに飛驒国の儀は、御一新に相成つていよいよ難渋におちいり、却って幕府の時よりも悪しく成りゆくのみと申上げ候ところ、少し御立腹にて御退座に相成り候ゆえ、今日は宿元へまかり帰り候。

これにては心配に相成り候えども、宇田栗園様は万事ふかく御理解の筈に候えば、ひたすらそれを頼みに致しおり候。宇田様は二十三日に行政官府県係権判事に成らせられ候。それゆえ到つて都合よろしく候。

なお郡中のこと、いろいろ御尋ねこれあり候えども、答えることむずかしく候。その答と申すは、人別米、山方米、安石代等の起りしことに候えば、郡中の内より相談に相成る人をつかわし下されたく候」

つづいて彼はまた手紙にかいた。

「……二月一日、宇田様へまいり候ところ、まずまず安心いたし居るよう申しきけられ候。おいおい阿多野郷、小坂郷、その他奥村よりそれぞれ乞食にまかり出で候様子、拙者もすでに道中にて、阿多野郷より出てきた人に逢い申し候こと、なおおいおい乞食に出で候風聞、一々

申上げおき候。調練の本玉あたりてケガ人出来の事、梅村いたつて淫乱にて、水野おたかなるものを密通取調べと称して召出し、手ごめに致されしこと、一々宇田様のお耳へ申入れ候こと」

つぎの便りでは彼はさらにこう書いた。

「……ごく密々ながら、宇田栗園様こと、飛驒県へ任命のこと、岩倉殿にて相きまり申候。何があるとして交りは生じまじと存じ候えども、万一かれこれ申すもの無きやも計り難きにつき、十日までには御上京の由。岩倉殿、宇田様、脇田様御相談のところにて、安値段買受米の儀はこれまでどおりに致し、蓄穀はこれまで金納御石代の金子にて五六年も北国より米を買入れ、それを年々詰めかえ致しおき候ようのつもりに候。郷兵、商法局は皆々御廃止、人別米山方米はこれまでどおりと内々承わり候。しかし刑法官にては表向き申し渡しこれなく、それを待ちうけ罷り在り候ところ、梅村様四日八ツ時御上洛、若狭屋権兵衛方へ御着のおもむき承わり候。

御注意もあり、わしはあちこちと身を隠しおり候も、もし異変ある時は申上候間、この段御安心下さるべく候。随分えらい人でも変死する時なれば、我々は塵も同然につき、もしもの事これあり候とも、少しも心配なし

下されまじく、この由親類家内へも申しきけおき下されたく願上奉り候。非命の死をとげ候とも、国人のためならば少しも心残りこれなく候。この度は心をきめて国を出で候えば、何とぞ願いずみに相成るまで在京の心ぐみに候」

二

ひまをみて、善右衛門は東本願寺へ参詣して、もどりに参詣宿の丹波屋の店さきに立寄って休んだ。ききなれぬ地方言葉で声高に話し合いながら、おのぼりさんの百姓らしい男女が六七人、番茶をすすり、駄菓子をつたててごたごた休んでいた。この群と離れて、五十ばかりの小柄な商人風の男がひとり、何か大きな心配事があるらしく、いかにも寂しい、うれわしげな顔つきでぼんやり往来へ目をやっているのが川善の目にとまった。彼はその横顔をみながら、たしかに見おぼえがあると思った。気がつく、高山で宿屋稼業の三川屋市右衛門だった。別に親しい間柄ではなかったが、互いに顔はよく知っていた。川善はつかつかと三川屋の側へ行つて、なつかしげに声をかけた。三川屋もおどろいて、うれしげに挨拶したが、やはり暗い、悄然とした顔つきは隠しようもなかった。

「京まいに來られたかえ、ご苦労さま」と川善はいそよく話しかけた。

「はア、カカにせがまれて、やっと京都まではきたなれど……」市右衛門はそこまで言つて、意味ありげに口ごもつた。

「ほほう、女房といっしょで？ どうしてここに見えぬのじゃえ？」

「けさから気分が悪いと言つて、宿で寝ておるんじやさ」

「ほう、たいしたこと無ければええが。そう言や、お前もからだのかげんが悪いのじゃ無いかのう、えらい元気が無いようにみえるが……」

川善はそう言つて、三川屋の暗い、やつれた顔をじっと見た。市右衛門は目をふせたが、その睫毛に涙がたまつて、今にもはふり落ちそうになった。彼は目をあげて、弱々しい、訴えるような目つきでちよつと川善の顔をみていたが、やがていかにも堪えかねるという様子で、小さい声でこう言い出した。

「じつは、ずいぶん話しにくい事なんじやが、こんな所でめぐり会つたのも深い因縁じやろうで、ひとつ聞いてもらおか」

「ああ、良えとも。苦しい時はお互いさまじや。何でもきくで話さっしゃれ」

そして川善は三川屋にびったり寄りそうようにして並んで腰をおろした。

市右衛門があたりに気をくばりながら、涙を流して語る